The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス社会党（PSF）の誕生と発展（1）：極右同盟から議会政党へ
Author(s)	竹岡，敬温
Citation	大阪大学経済学. 2010, 60(2), p. 22-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50242
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス社会党（PSF）の誕生と発展（1）

――極右同盟から議会政党へ――

竹　岡　敬　温†

1. フランス社会党（PSF）の結成

1936年6月5日，総選挙の勝利を受けて成立した社会党党首レオン・ブルムを首班とする人民戦線内閣は，6月18日，火の十字架団を含むすべての極右同盟を解散させた。極右同盟の解散は，火の十字架団の委員長フランソワ・ド・ラ・ロックに合法的政治行動への道を開き，かれの運動にとって新しい出発点となった。

ド・ラ・ロックとかれの同僚たちは，火の十字架団が解散させられるかもしれないと気づいたときから，すでに合法政党結成の可能性を検討し，フランス社会党（Parti Social Français 略称PSF）の構想が急速に練り上げられ，火の十字架団解散後まもない1936年6月24日に新党結成のコミュニケが発表された。フランス社会党（PSF）に正式に加盟した下院議員はわずかに8人にすぎなかったが，大衆政党になるために組織の再編成が迅速にすすめられた。火の十字架団時代と同様，新しい組織の基礎的単位も各地区の支部であったが，フランス社会党（PSF）は選挙にそなえて地方委員会の数をふやし，各支部の執行部には委員長，副委員長，書記，会計などの職権を委任された役員が置かれた。県レヴェルでは県支部が組織され，やがて，2つ以上の近隣県支部からなる地域支部も設立された。

火の十字架団時代の軍隊的戦闘組織「ディスポ」は，その名称が含んでいた軍隊的意味を薄めた「宣伝遊撃班」に取って代わられた。「宣伝遊撃班」は，本部に集権化されていた「ディスポ」とは違い，各支部ごとに配置され，各支部の管轄下に置かれて，地方の小集会への弁士の派遣，機関紙『ル・フランボー』の販売，パンフレットの配布，貼付ポスターの監視，集会の警備など，その役割は多岐にわたった。

これらの新しい組織は多くの県では数週間以内でつくりあげられ，1936年秋までには，フランス社会党（PSF）は急速な成長をとげた。旧火の十字架団のかなりの数の団員たちはド・ラ・ロックの新しい方針に失望して，かれのもとを去ったけれども，それをはるかに上回る多数の団員が新党の結成に参加し，また，多くの新来者が新党に加わった。1936年6月28日にはジャック・ドリオによってフランス人民党が結成されたが，同党との党員獲得競争にもかかわらず，フランス社会党（PSF）は，1936年末までに70万人の新しい加入者があったと主張している[1)]。

国会の議席獲得をめざす合法政党になったフ

† 大阪大学名誉教授

1) PSF, *Bulletin de la section de Lunéville*, 29 novembre 1936; *Archives départementales du Nord*, 68J104, Equipes Volontaires de Propagande, n.d.; *Archives de Paris*, 212/69/1, article 149, Comité local du 18e arrondissement de Paris du PSF à La Rocque, 5 octobre 1936; Gareth Howlett, *The Croix de Feu, the Parti Social Français and Colonel de La Rocque*, PhD dissertation, Oxford University, 1985, pp.210-211; Philippe Machefer, Le Parti Social Français en 1936-1937, *L'Information historique*, 34, mars-avril 1972, p.74.

ランス社会党（PSF）は，共和制の選挙の原理を受け入れることをあきらかにしたが，しかし，8人の下院議員しかもたない同党には，議会では端役しかあたえられなかった。そのため，早くも1937年末には，ド・ラ・ロックは，「普通選挙の意志は尊重されなければならない。1936年5月の普通選挙は，人民戦線の実験に賛意を表したようにおもわれる。この実験が成功であったならば，それを続けなければならないが，いまや誰の目にもあきらかなように，それは失敗した。それが失敗であった以上，約束を国民に返し，できるだけ早く，あらためて有権者の意見を問わなければならない[2]」とのべて，主権を有する国民の審判を受けるよう主張した。また，フランス社会党（PSF）政治局長エドモン・バラシャンも，1937年12月，「選挙制度の改革を議決したあと，主権者である国民の判断に戻して，その審判を求めなければならない[3]」との意見を表明した。

フランス社会党（PSF）は結成当初から，人民戦線政府にたいして激しい敵意をあきらかにしていたが，もちろん，レオン・ブルム内閣の敵はフランス社会党（PSF）だけではなく，多数いた。極右系新聞『グランゴワール』『カンディード』『ジュ・シュイ・パルトゥー』の諸紙は，人民戦線内閣成立後，激しい反ユダヤ主義の運動に乗り出し，とりわけ首相レオン・ブルムと内相ロジェ・サラングロにたいする非難キャンペーンを展開し，サラングロが第1次世界大戦中，軍隊を脱走し，ドイツ軍に情報を提供するために，敵の防衛ラインを越え，軍法会議にかけられた[4]ことを非難した。この誹毀的攻撃は，最後にはサラングロを自殺に追いやった。議会では，最右翼の共和派連盟議員たちが，たとえフランスが革命を避けえたとしても，人民戦線によって滅亡させられるであろうと主張した。民主同盟と人民民主党は，政府が提出したいくつかの法案の制定を支持したが，急進党に人民戦線を去り，右翼穏健派と手を組むよう呼びかけた[5]。

これらの右翼諸勢力のなかで，フランス社会党（PSF）は人民戦線のもっとも非妥協的な敵対勢力のひとつであった。ド・ラ・ロックはレオン・ブルム内閣の手になる諸改革を厳しく非難し，週40時間労働法などの「苛酷な」政策はフランスの産業を窒息させるであろうと主張し，国防産業の国有化の結果はとりわけ悲惨であり，小麦局の設立は，ひそかに共産主義革命への道筋をつけようとしている人民戦線が，フ

---

2) *Archives de la préfecture de police de Paris*, La Rocque, 79.501.2726.2, dossier 291 286, cit. par Philippe Machefer, Le Parti social français, in René Rémond et Janine Bourdin éd., *La France et les Français en 1938-1939*, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, Paris, 1977, p.309.

3) *L'Espoir français*, 3 décembre 1937.

4) ロジェ・サラングロの要請によって，陸軍省から関係書類の提出を受けた全国在郷軍人連合の2人の代表は，サラングロが，戦死した友人の遺体を取り戻すために，上官の許可をえてフランス軍の防衛ラインの前方に出て，捕虜になり，このような場合の規則として，軍法会議にはかけられたが，3対2で無罪を宣告された，と結論した。それにもかかわらず，極右のキャンペーンはやまなかった。Edouard Bonnefous, *Histoire politique de la Troisième République*, Ⅵ *Vers la guerre. Du Front populaire à la Conférence de Munich (1936-1938)*, PUF, Paris, 1965, pp.62-78; Georges Lefranc, *Histoire du Front populaire*, Payot, Paris, 1965, pp.212-216; Jacques Rouvière, *L'affaire Salengro ou les bas-fonds de la politique*, Belfond, Paris, 1982; Thomas Ferenczi, *Ils l'ont tué ! L'affaire Salengro*, Plon, Paris, 1995; 平瀬徹也『フランス人民戦線』近藤出版社，1974年，pp.174-175；竹岡敬温『世界恐慌期フランスの社会－経済 政治 ファシズム－』御茶の水書房，2007年，pp.626，658.

5) René Rémond et Janine Bourdin, Forces adverses, in Janine Bourdin éd, *Léon Blum chef de gouvernement 1936-1937*, Armand Colin, 1967, pp.137-159; William D. Irvine, *French Conservatism in Crisis. The Republican Federation of France in the 1930s*, Louisiana State University Press, Baton Rouge, 1979, pp.84-95; Andrew Shennan, The Parliamentary Opposition to the Front Populaire and the Elections of 1936, *Historical Journal*, 27, 1984, pp.677-695; Donald Wileman, P.-E. Flandin and the Alliance Démocratique, 1929-1939, *French History*, 4, 1990, pp.153-154; Jean-Claude Delbreil, *Centrisme et démocratie-chrétienne en France. Le Parti Démocrate Populaire des origines au M.R.P. (1919-1944)*, Publications de la Sorbonne, Paris, 1990, pp.293-295.

ランス農民をそっくり帝政ロシア時代の百姓に変えようとしているとの予感をいだかせるものだと批判した[6]。1936年8月8日の『ル・フランボー』紙上で，ド・ラ・ロックは，「西ヨーロッパにおけるコミンテルンの策動は，いまや決定的な段階にさしかかっている。その本部はパリにある。ブルム内閣はそれに有利な情況をつくり出し，多くの障害を取り除いてきた。わが国と北アフリカとのボルシェヴィキ化の予備的条件は，すでに満たされた。すでにモスクワから訓令が発せられた（この部分，原文イタリック）」とのべ，この終末論的な状況からフランスを救うことができるのはフランス社会党（PSF）だけであると書いている[7]。

フランス社会党（PSF）は，レオン・ブルムにたいする個人攻撃も辞さなかった。ド・ラ・ロック自身は，1934年に公刊したその著書『公共の奉仕』のなかで，ナチスの人種論を批判し，人種差別に反対していた[8]。フランス社会党（PSF）の指導的幹部にはユダヤ人もいて，非左翼ユダヤ人の加入が歓迎されたが，しかし，レオン・ブルムが人民戦線政府の首相になったときには，ブルムにたいする反ユダヤ主義的中傷が党内にしだいに広まった。

反ユダヤ主義が露骨だったのは，とりわけアルジェリア支部においてであり，1936年8月，フランス社会党（PSF）の下院議員スタニスラス・ドヴォーが「われわれは，この国における正義，自由，友愛の理想の最終的勝利を確実にするために，ユダヤ人に反対し，ユダヤ人ブルムに反抗して，純粋な血統のフランス人，あるいは帰化してフランス人になった現地人を結束させなければなりません」とのべた[9]。アルジェリアでの選挙区，とくにコンスタンティーヌでは，ユダヤ人が堅固な左翼ブロックを形成していたこともあって，アルジェリアの右翼全体が反ユダヤ主義であり，フランス社会党（PSF）アルジェリア支部でも根強いユダヤ人差別が続いたのである[10]。

フランス社会党（PSF）結成後の数か月間，同党の党員およびシンパと人民戦線の活動家あるいは警察機動隊とのあいだで，何度も，激しい衝突事件が起こった。最初の衝突は，1936年7月5日の夕方，エトワール広場で，在郷軍人諸団体による凱旋門の下の無名戦士の墓の献火式のときに起こった。フランス社会党（PSF）の下院議員イバルネギャレーは内相サラングロにたいして合法主義を尊重するという約束をし，ド・ラ・ロックは，かれの支持者たちにたいして，「式典に出席するのは妨げないが・・・いかなる騒擾行為にも加わらないよう」要請していた。しかし，翌日の警察の報告によれば，違法な召集によって1万人が呼び集められ，警察機動隊とのあいだで激しい乱闘が起こり，107人の警官が負傷し，暴徒21人が逮捕され，逮捕者の「ほとんどは解散させられた極右団体のメンバーであった[11]。」

その後も，全国各地で，フランス社会党（PSF）と人民戦線勢力とのあいだの衝突が続いた。ヴァカンスが終わった1936年9月以後，フランス社会党はフランス全土で宣伝集会の開催数を増やしていったが，9月半ばには，ド・ラ・ロックは人民戦線側の対抗デモにははっきりと立ち向かう決心をし，そのことを内相サラングロにも伝えた。以後，宣伝集会の開催は秘密裡におこなわず公表され，これにたいして，人民戦線派は，毎回，「街頭での攻撃」を呼びかけた。9月末，ド・ラ・ロックは，仲間たち

6) *Le Flambeau*, 25 juillet 1936.
7) *Le Flambeau*, 8 août 1936.
8) François de La Rocque, *Service Public*, Grasset, Paris, 1934, pp.154-155, 157, 160-161, 199.
9) *Centre des Archives d'Outre-Mer*, B3 635, sûreté départementale (Constantine), 14 août 1936.
10) William D. Irvine, Fascism in France and the Strange Case of the Croix de Feu, *Journal of Modern History*, 63, 1991, pp.292-293; 竹岡前掲書. pp.872-873.
11) Jacques Nobécourt, *Le colonel de La Rocque 1885-1946 ou les pièges du nationalisme chrétien,* Arthème Fayard, Paris, 1996, pp.442-443, 1040.

に「マルクス主義の明白な危険」にたいして「全員の奮起」を促し[12]，敵対者をその縄張りにおいて挑発しようと考え，10月2日，パリ最大の集会場，冬季競輪場にフランス社会党（PSF）の大集会を召集することを決定した。冬季競輪場はパリでもっともプロレタリア的な地区の心臓部であり，左翼勢力の大聖堂であった。

パリ警視総監は，共産党が，この冬季競輪場での開催が計画されていたフランス社会党（PSF）の集会を粉砕しようとおどしているという理由で，この集会を禁止した。共産党は，10月4日にパリ16区のプランス公園のスタディアムで同党の集会を計画し，警視総監がこれを禁止しなかったのを知ったとき，ド・ラ・ロックは憤慨し，フランス社会党（PSF）は，共産党が集会後パリの富裕な地区，16区を行進してまわるつもりだと主張して，プランス公園周辺での対抗デモを計画した。

10月4日には，共産党の集会を妨害するために，1万5,000人から2万人のフランス社会党（PSF）の党員——同党の発表では4万人——が動員された。それは，どの右翼政党も，どの極右同盟も，また，ジャック・ドリオのフランス人民党でさえも張り合うことのできなかった動員力であった。しかし，集まった党員たちは警察と機動憲兵隊のかなり大きな集団と立ち向かわなければならなかった。その前日，ド・ラ・ロックは，「だれも火器を携帯してはならず」「対抗デモは粘りづよく冷静におこなわなければならない」との通達を出していた。当日，フランス社会党（PSF）の党員たちは，警官たちに保護されて共産党員をスタディアムに運ぶバスに向かって石を投げつけたが，しかし，両党のあいだではこれ以上の衝突はなく，衝突が起こったのはフランス社会党（PSF）と警察とのあいだでであった。警察側では30人，フランス社会党（PSF）側でも多数の負傷者が出て，1,149人が逮捕され，11人のフランス社会党（PSF）員が告訴されたが，そのうちの2人は小火器を携帯し，1人は攻撃的武器をもっていたとの嫌疑からであった[13]。

10月8日には，警察はフランス社会党（PSF）のパリ事務所とド・ラ・ロックや多数の幹部メンバーの住居を急襲し，計50箇所の家宅捜索をおこない，ド・ラ・ロックとフランス社会党（PSF）の指導者たちは，火の十字架団を「不法に再組織し，凶悪な意志をもって・・・不法な集会をおこなった」として告訴された。これにたいして，ド・ラ・ロックは，フランス社会党（PSF）の行動は「共産党による政権掌握の陰謀」を止めた「4万人のパリ市民の大規模で自発的な召集」であると主張し，人民戦線政府の行動を反革命運動の取り締まりに当たったソ連の非常委員会（1917 − 1922年）の行動になぞらえ，「開始されたのはフランス社会党（PSF）の裁判ではなくて，共和主義的自由の裁判である[14]」と言明した。

告訴と警察の取り調べは，火の十字架団についでその後継組織フランス社会党（PSF）もまた解散させられるのではないかとの懸念を引き起こしたが，それにもかかわらず，同党の多数支部はその旺盛な活動をやめようとはしなかった[15]。プランス公園の事件から2か月後，セーヌ・エ・オワーズ県知事が「フランス社会党（PSF）は，デモ隊によって掩護され，準軍隊風に準備された集会を繰り返しおこない，そのためにパリ市民のあいだではしだいに不安が大きくなっている。パリ市民たちは，それらの集

12) Fondation Nationale des Sciences Politiques, *Archives De La Rocque*, Ligue dissoute, interrogatoire du colonel, 4 décembre 1936, pp.21-22; J. Nobécourt, *op. cit*., pp.466, 1043.

13) 竹岡前掲書, pp.833-836; 剣持久木『記憶の中のファシズム “火の十字団”とフランス現代史』講談社, 2008年, pp.94-96.

14) *Le Flambeau*, 10 octobre 1936.

15) Sean Kennedy, *Reconciling France against Democracy. The Croix de Feu and the Parti Social Français 1927-1945*, McGill-Queen's University Press, Montreal & Kingston, London, Ithaca, 2007, pp.126-127.

会を挑発とみなしている」との所見をのべている[16]。

フランス社会党（PSF）は，人民戦線が政府権力を濫用し，反対勢力を不公正に扱っていると非難しつづけた。それは，フランス社会党（PSF）こそ共和制の正当な擁護者であると主張することによって，政府より道義的に高い立場に立とうとする戦術であった。1936 − 1937年の冬，人民戦線政府が，公共の場所でのフランス社会党（PSF）の集会を衝突が起こるとの理由で禁止したとき，同党は支持者たちの私有地を使用することに決め，政府は共産党を同じように扱ってはいないではないかと非難した[17]。

1936年10月4日にプランス公園周辺でフランス社会党（PSF）と警察とのあいだで発生した衝突は，まもなく人びとの集合的記憶から消え去ったが，1937年3月16日の晩の「クリシーの銃撃事件」は，とくに左翼の人間たちに大きな衝撃をあたえ，「潜在的内戦」のこの時期に起こったもっとも堪えがたい衝突事件として，かれらの記憶のなかに長くとどまった。

当日，フランス社会党（PSF）クリシー支部がその地区の党員と家族にみせるための映画の上映を計画した――それは「無害で，ほとんど家族的な集い」（レオン・ブルム）であった――が，そこにド・ラ・ロックが姿をあらわすという噂が流れ，それを挑発と受け取った同地区の人民戦線活動家たちは対抗デモを呼びかけた。クリシーはパリ北西の工業都市で人民戦線の砦のひとつであり，反対集会の呼びかけは市の告知板に掲示され，社会党の市長，同市選出の共産党下院議員と同党市会議員が署名していた（事件後，レオン・ブルムは国会で，「クリシー市民への呼びかけは，わたしの考えでは，誤りであり，過失以上に悪いものである」と語ることになる）。これにたいして，政府と警察は，1,800人の警官と機動憲兵隊を配置して，デモ隊が映画館を避けるようにその行進に制限を加え，秩序を確保しようとした。しかし，その思い通りには事態は運ばなかった。

映画館は終日，フランス社会党（PSF）の党員によって警護され，午後6時30分頃，300人から400人の観客が映画館にはいった。午後6時に市役所前広場周辺に集まった人民戦線派のデモ隊はしだいに人数が増え，デモ行進のあと，8,000人から9,000人にふくれあがったかれらは，午後9時頃，映画館への道路を遮断していた警察のバリケードと対峙した。クリシー選出の下院議員たちがデモ隊に他の進路に進むよう勧告し，危機的な状況の緊張を和らげようとしたが，しかし，デモ隊の一部しかこの勧告に従わず，やがて，その場を動こうとはしなかった大勢のデモ隊と警察の非常線とのあいだで衝突が起こった。

進路を転じようとしていた少数のデモ隊員も結局は元の隊に戻ってきたので，警察のバリケードに加えられる圧力は増大した。午後9時15分，映画が終わったので，警察は映画の観客に非常口を通って出るように命じ，だれひとり怪我するものもなく，観客は警備員の指示にしたがって退去し，映画館は空になった。衝突がエスカレートしたのは，そのあとであった。警視総監，内相マルクス・ドルモワ，官房長官アンドレ・ブリュメルとともに警察の増援部隊を乗せたワゴン車が到着したとき，群衆はワゴン車に投石し，午後9時45分頃，突然，一斉射撃が起こり，ブリュメルは2発の銃弾を腿と腋の下に受けて倒れた。状況は混乱していた。射撃を開始したのは警官だったとおもわれるが，銃を打ったのは火の十字架団のメンバーだったという噂が播き散らされた。銃声が静まったとき，警察側には死者はなかったが，

---

16) *Archives départementales de L'Yvelines*, 4M2 66, préfet, 24 décembre 1936.

17) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 1952, rapport, 25, 26 septembre 1936; *Archives Nationales*, F^7 12819, rapport, 6 février 1937, 12820, rapport, 23 mars 1937.

257 人が負傷し，そのうち 5 人は銃弾によるものであった。デモ隊側では，6 人が死亡，約 300 人が負傷し，そのうち 48 人は火器によるものであった[18]。

フランス社会党(PSF）は，クリシーで起こった出来事について，政府と左翼全体に責任があると主張し，『ル・フランボー』紙は当夜の映画会が家族的な集いにすぎなかったことを強調して，共産党と社会党の挑発的行為を非難した。同紙がクリシーで左翼のデモ隊の行動を阻止した警察を「賞賛すべき秩序の擁護者」とのべる一方で，国会ではイバルネギャレーが，レオン・ブルムを，1919 年にドイツで極左の「蜂起」の鎮圧を軍隊に命じたドイツ社会民主党のグスタフ・ノスケになぞらえた[19]。右翼の議員たちのあいだでは政府にたいする批判が強かったが，急進党の指導者のひとりダラディエや社会主義共和派連合のフロサールのような，人民戦線に加盟している中道左派の議員たちでさえも，集会の自由に加えられた脅威にたいする懸念を表明した[20]。

「クリシーの銃撃事件」の翌日，1937 年 3 月 17 日，社会党機関紙『ル・ポピュレール』と共産党機関紙『ユマニテ』は，「労働者の血を流した」のは「元火の十字架団」であると書き立て，ド・ラ・ロックを扇動罪で逮捕するよう要求し，労働総同盟（CGT）は 3 月 18 日のストライキの決行を呼びかけた。こうしてクリシー事件は政治的かけひきの様相を帯びるにいたったが，しかしながら，結局，クリシー事件は人民戦線の統一をいっそう掘り崩す役目をしたようにおもわれる。共産党は社会党が労働者階級を抑圧していると激しく非難し，他方で，打ちつづくストライキと街頭デモが引き起こす社会的動揺の持続と財政問題の深刻化を憂え，共産党を恐れていた急進党は，レオン・ブルム内閣によるフランス社会党（PSF）の厳しい扱いにしだいに批判的となった。すでに 1937 年 2 月のラジオ演説で，ブルムは人民戦線の諸改革の「休止」宣言を余儀なくされ，財政を立て直すために保守的な財政政策を採用せざるをえず，真剣に辞任を考えるようにさえなっていた[21]。

その間，プランス公園周辺でのフランス社会党（PSF）の行動にたいする訴訟手続が進んでいた。1937 年 4 月 5 日，取り調べを担当していた予審判事は，プランス公園での出来事と解散させられた極右同盟の再建との責任を問うために，ド・ラ・ロックとかれの同僚たちの裁判を命じた。実際には，委任立法によって財政を立て直し資本流出を停めるために必要な，財政全権を政府にあたえることを上院が拒否した結果，レオン・ブルム内閣は総辞職し，裁判はそのあとでしか始まらなかった。その間，フランス社会党（PSF）は頻死の人民戦線政府にたいして攻撃を加えつづけ，同党下院議員フェルナン・ロッブは，財政全権を手に入れようとするブルムの企てを議会の立法権の侵害であると非難した[22]。

1937 年秋に始まった裁判では，ド・ラ・ロックは，政府がフランス社会党（PSF）の同意している共和主義の価値観を過小評価していると

---

18) *Archives Nationales*, F^{7} 13985, rapport sur l'incident de Clichy, 25 mars 1937; G. Howlett, *op. cit*., pp.240-241; John Rymell, *Militants and Militancy in the Croix de Feu and Parti Social Français. Patterns of Political Experience on the French Far Right (1933-1939)*, PhD dissertation, University of East Anglia, 1990, pp.201-202.

19) *Le Flambeau*, 20, 27 mars 1937.

20) かつては火の十字架団の下部組織，国民義勇軍の幹部のひとりであり，その後，ドリオのフランス人民党のメンバーとなっていたベルトラン・ド・モーデュイは，アメリカ大使館の 1 館員との議論のなかで，クリシーにおける火の十字架団の集会は「必要ではなかったかもしれないが」，しかし，フランス社会党（PSF）やフランス人民党が共産党の優勢な地区で集会を開くことができなければ，共産党の影響は拡大するであろうといい，その理由から，クリシーの集会は正当であったとのべている。*United States National Archives*, RG 59 851. 00/1661, report by Wilson, 6 April 1937; S. Kennedy, *op. cit*., p.129.

21) 平瀬前掲書, pp.81-84; 竹岡前掲書, pp.267-280; 剣持前掲書, pp.98-101.

22) *Le Flambeau*, 9 juin 1937.

激しく非難して，人民戦線政府を挑発した。フランス社会党（PSF）は独裁的な人民戦線に反対する共和制の擁護者であるという，同党の主張が，いかに人を惑わせるものであったにせよ，敵対者を民主主義の正真正銘の敵として糾弾する同党の挑発戦術は，なにほどか，人民戦線の支持者たちに士気喪失のインパクトをあたえたにちがいない[23]。

フランス社会党（PSF）の前身，火の十字架団は，1936年6月，それが解散させられたとき，およそ45万人の団員を擁していたが，フランス社会党（PSF）結成後，同年11月には，その党員数は60万人になり，結党後半年足らずにして，同党の党員数は社会党（Section Française de l'Internationale Ouvrière 略称SFIO）（20万2,000人）とフランス共産党（28万4,000人）の両党を合わせた合計を凌駕し，1937年には70万人を大きく越えていた[24]。それは，フランス社会党（PSF）と同時期，1936年6月末にジャック・ドリオによって結成され，急速な党勢拡大をみたフランス人民党をはるかに上回る顕著な党員数の増加であった。

ここで，フランス社会党（PSF）とフランス人民党の両党の結成初期の党勢拡大の状況を比較しておきたい。フランス人民党については，つぎのようにいえよう。すなわち，1936年4－5月の総選挙における人民戦線の勝利と，5月末から6月初めにかけて全国に波及した座り込みストライキの波が，右翼の世界に引き起こした不安，スペイン人民戦線政府にたいするフランコ将軍のクーデタによって掻き立てられた復讐の願望，それにくわえて，人民戦線政府による極右同盟の解散命令を受け入れ，フランス最大の極右同盟に成長していた火の十字架団を議会政党フランス社会党（PSF）に変えた，ド・ラ・ロックの穏健化方針への転換，これらすべてがフランス人民党に極右諸新聞の熱狂的な支持を集め，極右の人物たちを結集させたのであった。こうして，フランス人民党は結成当初から経済界の主要グループからの多額の財政援助を受け，党勢を急速に拡大させることができたのである。

フランス人民党の機関紙『国民解放』によれば，1936年7月末に4万人以上になっていた党員数は，同年10月には10万人以上，1937年9月には20万人を超えて，1938年初めには30万人に達しようとしていた[25]。もちろん，これらの公式発表の数字はあきらかに水増しされていたと考えられる[26]が，しかし，フランス人民党の党員数は，その絶頂期（1937年中頃）には，すくなくとも10万人を超えていたであろうと考えられている[27]。しかしながら，フランス社会党（PSF）の党員数の増加は，これよりはるかに急速だったのである。

ルネ・レモンは，フランス社会党（PSF）が，結成後，このように広範な支持者の獲得に成功し，めざましく成長したのは，ド・ラ・ロックの組織が合法政党に変化し，選挙に候補者を立て，かれらを議会に送るという，それまでより穏健な新しい路線を進むことになったからだと

---

23) S. Kennedy, *op. cit*., p.130.

24) Ph. Machefer, Le Parti Social Français en 1936-1937, op. cit., pp.74-80; Philippe Machefer, L'Union des droites. Le PSF et le Front de la Liberté, 1936-1937, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 17, mars-avril 1970, p.113; W.D. Irvine, *op. cit*., pp.112-158; Philippe Machefer, Sur quelques aspects des activités du colonel de La Rocque et du《Progrès social français》pendant la Seconde Guerre mondiale, *Revue d'histoire de la Deuxième Guerre mondiale*, 58, avril 1965, p.36.

25) Dieter Wolf, *Doriot. Du communisme à la collaboration*, Arthème Fayard, Paris, 1969, p.217, 平瀬徹也・吉田八重子訳『フランスファシズムの生成　人民戦線とドリオ運動』風媒社, 1972年, p.223; Jean-Paul Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, Balland, Paris, 1986, p.228.

26) D. Wolf, *ibid*., p.223, 平瀬・吉田訳, p.229. Philippe Burrin, *La dérive fasciste. Doriot, Déat, Bergery, 1933-1945*, Editions du Seuil, Paris, 1986, pp.285-286; Claude Popelin, *Arènes politiques*, Arthème Fayard, Paris, 1974, p.116; 竹岡前掲書, pp.912-913.

27) J-P. Brunet, *op. cit.*, p.229; 竹岡上掲書, p.912.

考えている。フィリップ・マシュフェールも同様に，フランス社会党（PSF）の顕著な党勢拡大の原因をド・ラ・ロックの「穏健化」，選挙に基礎を置いた合法政党の容認に帰している。ジュリアン・ジャクソンもまた，フランス社会党の人気の上昇を同党の過激主義放棄のせいにし，「この共和制への加担にはわずかばかり政治的ご都合主義があったとしても，意味深い点は，ド・ラ・ロックが，かれがもっとも穏健にみえたときに，その最大の影響力を発揮できたことである」とのべている[28]。

これにたいして，ウィリアム・アーヴィンは，フランス社会党（PSF）のめざましい発展の理由を1936年4－5月の選挙における人民戦線の勝利が引き起こした「大きな恐怖」に求め，人民戦線の政権掌握，全国的に広がった座り込みスト，労働争議を解決するために人民戦線政府が首相官邸マティニョン館に経営者と労働者の代表を呼び，両者のあいだで調印させたマティニョン協定，それに続いた人民戦線政府による一連の社会立法（団体労働協約法，有給休暇法，週40時間労働法など）のために，「八方ふさがりになった保守主義者たち」の多くが，伝統的右翼の政党には期待できないとおもわれたもっと強力な対抗策を求め，火の十字架団・フランス社会党（PSF）に「潜在的な救い主」の姿をみたからだと説明し，ロバート・サウシーも，この説明を支持している。また，ゼーフ・ステルネルは，「極右同盟解散後，ド・ラ・ロックの運動がめざましく成長したのは，民主主義の美徳に突然とりつかれた組織に新しい支持者の大衆が加入しようとしたからではなくて，反対に，当時，既存の秩序を嫌悪する人びとがしだいに多くなっていたからである」と解釈している[29]。

さらに，サウシーは，これにくわえて，1936年以後，フランス社会党（PSF）が急速に発展し，もっとも重要な右翼政党に成長した主要な理由のひとつとして，同党が財界からの財政的支援に恵まれたことをあげている[30]。しかし，経済界，金融界からの多額の資金提供を受けたのは，フランス人民党も同様であった[31]。

フランス社会党（PSF）の党員数の急成長がフランス人民党のそれと同じく，1936年の人民戦線の政権掌握にたいする保守派の反撃であったことはまちがいない。1936年の左翼の脅威は，1924年の「左翼連合（カルテル・デ・ゴーシュ）」や1932年の新「左翼連合」の勝利[32]のときよりもはるかに重大であり，したがって，それにたいする反動はずっと強烈であった。しかし，フランス社会党（PSF）の党員数増加の勢いはフランス人民党のそれよりはるかに顕著だったのであり，前者については後者の場合とは別の理由を探さなければならない。「ド・ラ・ロックの穏健化」と「保守派の反撃」という2つの理由は，対立的ではなく補完的であったと解すべきであろう。

---

28) René Rémond, *Les Droites en France*, Aubier, Paris, 1982, pp.214-215; Ph. Machefer, Le Parti Social Français en 1936-1937, op. cit., p.80; Julliand Jackson, *The Popular Front in France. Defending Democracy, 1934-1938*, Cambridge University Press, Cambridge, 1988, p.253, 向井喜典・岩村等・振津純雄訳『フランス人民戦線史－民主主義の擁護，1934-38年－』昭和堂, 1992年, pp.287-288.

29) W.D. Irvine, *op. cit*., pp.98-99, 157-158; W.D. Irvine, op. cit., p.277; Robert Soucy, *French Fascism : The Second Wave, 1933-1939*, Yale University Press, New Haven & London, 1995, p.115, (traduction française) *Fascismes français? 1933-1939. Mouvements antidémocratiques*, Editions Autrement, Paris, 2004, p.178.

30) R. Soucy, *ibid*, pp.123-128, (traduction française) *ibid*., pp.189-195.

31) D. Wolf, *op. cit*., 平瀬・吉田訳, pp.214-218.

32) 1932年の総選挙は，得票数，議席数とも左翼の明確な勝利に終わった。それは，世界恐慌到来後，フランス国民のあいだにしだいに高まっていった危機感と根本的な変化への渇望をあらわすものであった。勝利した左翼連合のなかでは急進党が議席数で社会党を上回って第1党となり，急進党と社会党を与党とする急進党内閣が成立した。竹岡前掲書, pp.62-64.

2. 反人民戦線勢力結集の問題

1936年9月22日に開催されたフランス社会党（PSF）アリエ県ムーラン支部の集会で選出された同支部の新委員長は，火の十字架団の解散が大きな打撃であったことを認めながらも，急進党がすでに人民戦線政府を見放そうとしていて，同政府はやがて終わりを告げるであろうと断言し，いまフランス社会党（PSF）が真に憂えねばならないのは，「いまにもフランスをのみこみそうな共産主義の赤い波」であるとのべている[33]。そして，このように切迫した状況にもかかわらず，人民戦線が政権を握るまえにド・ラ・ロックが政権を取ろうとはしなかったのは，火の十字架団が主要な右翼政治家たちの支持をえていず，「時機がまだ到来していなかった」からであるが，しかし，いまや変化を起こすのは焦眉の急であるといい，アクシヨン・フランセーズ，フランシスム，愛国青年同盟，さらにはジャック・ドリオのフランス人民党との同盟計画がすでに着手され，フランコの勝利が近いスペインと同じく，フランスでも，「行動開始日と攻撃開始時刻が近く，各人は国民革命のために遅れをとらないよう注意を怠ってはなりません」と締めくくっている。

このムーラン支部委員長の発言にはいささか誇大な言辞を弄する傾向があったが，しかし，それは誕生したばかりのフランス社会党（PSF）に突きつけられた問題の多くを簡明にあきらかにしていた[34]。人民戦線政府成立直後に，そして極右同盟の解散命令の結果としてフランス社会党（PSF）が，さらにフランス人民党が反人民戦線勢力として結成されたために，状況は騒然としていた。左翼といかにたたかうかはフランス社会党（PSF）ひとりでは決定できず，フランスの他の右翼勢力との折り合いをうまくつけなければならなかった。ムーラン支部委員長のスピーチは，ド・ラ・ロックとその仲間たちが，左翼勢力にたいするかれらの強い嫌悪と憎しみと，あわせて，フランス国民がやがて人民戦線の実験を拒否し，かれらのリーダーシップを受け入れるであろうという確信をあきらかにしていただけに，当時のフランス社会党（PSF）内の支配的な雰囲気をよくとらえていた。

1936 − 1937年に国内の社会的緊張が高まるにつれて，反人民戦線勢力のなかで，フランス社会党（PSF）は，人民戦線とたたかうもっとも強力な団体とみられるようになった。このため，地方の全国在郷軍人連合支部がフランス社会党（PSF）との提携を考えたり，また，フランス連帯団，愛国青年同盟あるいはフェソー団など，元極右同盟のメンバーがフランス社会党（PSF）の支部設立に指導的な役割を演じたり，同党に入党したりする例がみられた[35]。

しかし，他方で，このようなフランス社会党（PSF）の急速な党勢拡大は，他のさまざまな右翼勢力のなかに，ド・ラ・ロックとその支持者たちにたいする疑惑と敵意を招くものでもあった。なかでもフランス社会党（PSF）をもっとも激しく批判したのは『アクシヨン・フランセーズ』紙であり，同党が「高雅であるべき愛国者を軽蔑すべき政治制度のなかに引き込んでしまった」と非難した[36]。共和派連盟もまた，フランス社会党（PSF）という新しい政党を選挙のライヴァルとして恐れた[37]。しかしながら，人民戦線政府の成立とその政権行使という状況下で，右翼諸グループはあまりにセクト主義に走ることはできず，1936年夏から秋にかけて，右翼勢力提携のためのさまざまな努力が試みられた。

たとえば，アルジェリアでは，さまざまな右

---

33) *Archives de Paris*, 212/691, article 151, commissaire de police (Moulins) au préfet de l'Allier, septembre 1936.

34) S. Kennedy, *op. cit*., pp.120-121.

35) S. Kennedy, *ibid*., p.130.

36) Philippe Machefer, L'Action Française et le PSF, *Etudes maurrassiennes*, 4, 1980, pp.125-139.

37) W.D. Irvine, *op. cit*., pp.132-133.

翼諸グループを統轄する「社会行動国民連合」という組織が発足し，1936年8月10日，アルジェで開かれたその集会は1万人の聴衆を集めた。聴衆はフランス社会党（PSF）下院議員フェルナン・ロッブを含む多数の演説家のスピーチに聞き入ったが，ロッブは「偉大な国民的和解」への希望を表明し，しかし，それは「人民戦線とその内部にある反国民的な巣窟を根絶やしにしたときにしか，そして，この国を破滅へと導こうとしているすべてのよそ者を追い出したときにしか達成できない」とのべた[38]。

同様な右翼勢力提携の努力はポワトゥー地方ヴァンデ県ラ・ロシュ・シュル・ヨン市でもみられ，1万人の人びとが「ヴァンデ県国民連合」の集会に集まった。国民社会共和党（元愛国青年同盟）の指導者ピエール・テタンジェのほかに，共和派連盟の派遣した演説家，全国在郷軍人連合の代表，『ル・フランボー』紙のコラムニストのレオン・ピエラらがスピーチをおこない，かれらはみな共産主義とたたかうための一致団結の必要を力説したが，ピエラひとりは，すべての「善意の人びと」が協働しながら，ド・ラ・ロックが政権を取るのを待っている，とつけくわえた[39]。

ピエラの言葉は，フランス社会党（PSF）指導部の政策と一致していた。指導部は党結成当初から，他の右翼グループとの協力にかんして，フランス社会党（PSF）が確実に最後には主導権を握るようにとの指令を発していた。他の政党との同盟は同党のリーダーシップが承認されたときにのみ可能とされ，とりわけ，「政治的な取り決めの締結はもっとも強力な党のリーダーシップ，すなわち，われわれのリーダーシップの下でおこなわれねばならず」，ド・ラ・ロックは，『ル・フランボー』紙上で，支部のリーダーたちに「すべての善意の人びとの反革命連合を受け入れるように。ただし，牛耳を執れ（この部分，原文は大文字）」と教えて，この指令を繰り返した[40]。しかし，ピエラの言葉やド・ラ・ロックの指令は，他の右翼グループにとってはきわめて挑発的であった。

フランス社会党（PSF）が同党の自主性維持を強調し，つねにリーダーシップを要求したことは，他のグループとの関係を複雑にし，悪化させた。同党と全国在郷軍人連合との関係がその適例である。80万人の会員数を誇っていた全国在郷軍人連合委員長ジャン・ゴワは反革命連合の必要をとりわけ熱心に説き，「共産主義への道を阻止しようと願うすべてのフランス国民の連合」を呼びかけたが，1936年夏の終わりから全国在郷軍人連合とフランス社会党（PSF）との接触が始まった。ド・ラ・ロックは，個人的には，両グループの協定が最後には他の組織をも引き入れることになるであろうと期待して，協定にたいしてかなりの熱意を表明したが，しかし，同時に，かれはフランス社会党（PSF）が行動の自由を失うことがないよう配慮を怠らなかった。

最終的には，1936年10月，両者のあいだで合意に達し，協定が結ばれたが，しかし，それは，地方レヴェルでの協定に限定され，両組織のそれぞれに完全な独立性をあたえるものであった。こうして，両者間のきわめて限定的な合意は，ジャン・ゴワによって提案された広範な連合を導くまでにはいたらず，その後，フランス社会党（PSF）と全国在郷軍人連合との関係も緊密にはならなかった[41]。1936年秋には，

38) Francis Kœrner, L'Extrême Droite en Oranie (1936-1940), *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 20, 1973, pp.574-577; *Centre des Archives d'Outre-Mer*, 1K26, sûreté départementale (Algiers), 10 août 1936; S. Kennedy, *op. cit*., pp.130-131.

39) *Archives départementeles de la Vendée*, 4M 413, préfet, 14 septembre 1936; S. Kennedy, *ibid*., p.131.

40) *Archives de Paris*, 212/69/1, article 151, circulaire, 16 juillet 1936; *Le Flambeau*, 8 août 1936.

41) *Archives de Paris*, 212/69/1, La Rocque à Goy, 5 octobre 1936; *Archives Nationales*, 451AP 116, La Rocque, circulaire du service général, 28 octobre 1936, 451AP 121, mémo, coopération, n.d.; 竹岡前掲書, pp.839-840.

この2つの組織のあいだには精神的な一致が存在するのではないかとおもわれたのだが，しかし，1937年春には両者の違いがあきらかとなった。同年3月，人民戦線政府が巨額の国防債を発行したとき，それを全国在郷軍人連合が「良識の勝利」と呼んだのにたいして，フランス社会党（PSF）は「邪悪なマキャヴェリズム」と評し，政府の企てにたいするむき出しの敵意を捨てようとはしなかった[42]。

フランス社会党（PSF）が結成されるまでは議会の最右翼を占めていた共和派連盟との関係は，いっそう希薄であった。共和派連盟は，新党の誕生によって，同連盟に票を投じてきた有権者の一部が奪われるのではないかと恐れたのである。グザヴィエ・ヴァラ――かれはまもなくフランス社会党（PSF）の厳しい批判者になるのだが――を含むいくにんかの共和派連盟議員が，最初は，両党の共同集会を呼びかけたが，しかし，1936年11月の共和派連盟全国評議会は，フランス社会党（PSF）が貴重な同盟者になるかもしれないと認めつつも，同党が選挙で強力なライヴァルになるであろうという懸念を長時間かけて議論した。こうして，フランス社会党（PSF）が，同党の下院議員と他の右翼諸政党の下院議員との絆を強めるためと称して，「フランス社会党（PSF）に共鳴する自由擁護国会委員会」を設立しようとしたとき，共和派連盟は強い疑念をいだいた。共和派連盟の下院議員の多くは，フランス社会党（PSF）が選挙では他のナショナリスト諸党と十分な協力をしようとはしないであろうとの確信を表明して，同委員会への参加を拒否した。同委員会の会合には47人の下院議員が参加したが，集まったのはたった1回にすぎなかった[43]。

この時期におこなわれた選挙では，最初は右翼諸政党間で若干の協力がみられた。『ル・フランボー』紙によれば，1936年11月，リヨンの郡会議員選挙で，共和派連盟は第2回投票で立候補を取り下げ，フランス社会党（PSF）の候補者の当選を可能にした。また，同月，ウール県の上院議員選出では，共和派連盟の勝利にフランス社会党（PSF）が協力した[44]。しかし，フランス社会党（PSF）は，下院のナショナリスト勢力のなかで優越した地位を失うまいとする共和派連盟の懸念を払拭できず，1937年春，ノルマンディー地方モルタンで実施された下院補欠選挙で，この問題が表面化し，右翼陣営の協力関係に暗い影を落とした。

モルタンでは，共和派連盟のメンバーで，かつて火の十字架団の支持者であった下院議員ギュスターヴ・ゲランが上院議員に選ばれ，その空席を埋めるための補欠選挙で，フランス社会党（PSF）の候補者ゴーティエがゲランの推薦を受けていたにもかかわらず，ゲランの知らないうちに，共和派連盟は独自の候補者ジョルジュ・ノルマンを立てて，ゴーティエを攻撃し，ゲランがフランス社会党（PSF）を支持したことを批判した。さらに共和派連盟がもうひとり別の候補者ジャック・ルグランをも支援したので，状況はいっそう複雑になった[45]。選挙運動の期間中，共和派連盟はフランス社会党（PSF）を攻撃しつづけた。しかし，第1回投票ではゴーティエがノルマンとルグランに大差をつけてリードしたので，ナショナリスト陣営の団結のため，共和派連盟の候補者は第2回投票では立候補を取り下げた。しかし，第1回投票で共和派連盟の候補者に投票した有権者の多くがゴーティエ支持を拒否したため，結局，民主同盟が議席を獲得した。『ル・フランボー』紙は，

---

42) *Le Flambeau*, 23 mars 1937; 竹岡上掲書, pp.840-841.

43) *Archives Nationales*, 451AP 120, lettre à La Rocque, 26 juin 1936, Vallat à La Rocque, 23 novembre 1936; W.D. Irvine, *op. cit*., pp.131-134; *Le Flambeau*, 21 novembre, 5, 12 décembre 1936; Jean-Noël Jeanneney, *François de Wendel en République. L'argent et le pouvoir 1914-1940*, Editions du Seuil, Paris, 1976, pp.567-568.

44) *Le Flambeau*, 21 novembre 1936.

45) W.D. Irvine, *op. cit*., pp.137-144; G. Howlett, *op. cit*., pp.244-247.

共和派連盟が，フランス社会党（PSF）を蹴落とすために，人民戦線と一種邪悪な同盟を結んだとあてこすった[46]。

右翼諸勢力間の軋轢の増大は，ある程度予測できたことであった。共和派連盟は新しい右翼政党，フランス社会党（PSF）の成長から得をすることはほとんどなかったし，全国在郷軍人連合もまたフランス社会党（PSF）とまったくは同じ立場にはなく，同党が，火の十字架団時代同様，在郷軍人の入党勧誘に熱心であったので，同党によってその支持基盤を掘り崩されるのを恐れる理由は十分にあった。しだいに大きくなる「共産主義の脅威」に直面して反共諸勢力間の協力が緊急に必要であったにもかかわらず，フランス社会党（PSF）があくまでもその自立性を守り，右翼諸組織の連合に加盟するというよりは，同党がリーダーシップを握り，同党の旗の下にナショナリストすべてを結集させようとした「尊大な」態度は，右翼協調の大きな障害となるものであった。しかし，フランス社会党（PSF）のリーダーたちは，他の右翼組織の大部分が，建設的なプログラムをもった大衆運動の真価を認めようとはしない，「偽りのリーダーたち」によって指導されていると主張しつづけたのである[47]。

ド・ラ・ロックとかれの同僚たちが共和派連盟その他の右翼諸組織に取って代わろうと望んでいた一方で，かれらは新しい競争者，1936年6月末，ジャック・ドリオによって結成されたフランス人民党の侵害工作から身を守らねばならなかった。フランス人民党の結成にはド・モーデュイ，ポプラン，ピュシューら火の十字架団からの転向者たち，ド・ラ・ロックの「合法主義」を非難して，かれから離反したものたちが参加していて，フランス社会党（PSF）の一部のメンバーにたいしてある種の吸引力をもっていた。こうして，フランス人民党は結成当初から多数の元火の十字架団団員を入党させ，フランス社会党（PSF）の幹部たちを悩ませていた[48]。たとえば，アルプ・マリティム県のヴァンスでは，フランス社会党（PSF）の地方支部がみずから解散して，全員がフランス人民党に加盟した[49]。

とりわけ状況が深刻であったのは，北アフリカであった。アルジェでは，元火の十字架団の支部長がフランス人民党に走り，フランス社会党（PSF）の地方組織の活動を妨げた。コンスタンティーヌでも同様な問題が生じ，オランではフランス人民党の党員数の増加がフランス社会党（PSF）のそれを凌駕した[50]。1936年11月，フランス人民党は，その第1回全国大会の740人の代議員のうち91人（比率にして12パーセント）が元火の十字架団とその下部組織，国民義勇軍のメンバーであると主張した[51]。ドリオはド・ラ・ロックを追い抜こうと願っていた。しかし，数か月のうちに，その願望は誤っていることが分かった。1937年春には，フランス社会党（PSF）の党員数は，フランス人民党のそれのほとんど10倍になっていた。

なぜ，フランス社会党（PSF）とフランス人民党とのあいだで党員獲得の激しい競争があったのか，また，なぜ，反人民戦線勢力の連携のためにはとりわけこの両党の協力が必要とされたのかは，ひとつには，この両組織の類似性によって説明できよう。両者はともに「愛国的

46) *Le Flambeau*, 24 avril 1937; 剣持前掲書, pp.112-113.

47) *Archives de Paris*, 212/69/1, article 152, Résumé d'une conversation avec X , n.d.; S. Kennedy, *op. cit*., pp.133-134.

48) S. Kennedy, *ibid*., p.134; 竹岡前掲書, pp.841-842.

49) *Archives départementales des Alpes-Maritimes*, 4M 542, commissaire divisionnaire de police spéciale, 1 octobre 1936, commissaire spécial (Cannes), 15 octobre 1936; S. Kennedy, *ibid*., p.134.

50) *Centre des Archives d'Outre-Mer*, F405, sureté départementale (Algiers), 24 septembre 1936, B3 327, sureté (Constantine), 7 décembre 1936; F, Kœrner, op. cit., pp.580-581.

51) D. Wolf, *op. cit*., pp.186-187, 190, 平瀬・吉田訳, pp.193-194, 198-199; J. Nobécourt, *op. cit*., p.571; S. Kennedy, *op. cit*., p.134; 竹岡前掲書, pp.841-842.

な」人びとの団結と権威主義的方向に沿った政治改革を呼びかけた。しかし，教義と運動のやり方にははっきりした違いもあり，フランス人民党は「新しいタイプの人間」を鍛え上げる必要を明示的かつ熱心に主張し，その急進的な直接行動主義への期待は，ファシズムへの強い関心を抱いていたベルトラン・ド・ジュヴネルやピエール・ドリュ・ラ・ロシェルのような知識人の支持を獲得した[52]。「新しいファシスト的人間」の創造はファシズムが目的とした社会改造の中枢を占めるものであったが，フランス社会党（PSF）の指導者たちの言説には，このような，社会の前進的な急進的改革や「新しい人間」の創造への衝動は欠けていた。この違いは重要であった。右翼支持者たちのなかには，両党の違いを識別するものもいたが，しかし，草の根レヴェルでは，両党協調への願望が根強く存在した。

右翼諸組織のそれぞれがあまりにセクト主義に走ってはならず，共通のナショナリズムの大義にたいする明確な態度を示さなければならず，最初は，フランス社会党（PSF）とフランス人民党の活動を協調させる努力が払われたが，しかし，両党の関係はまもなく悪化した。1936年秋には，アルプ・マリティム県などいくつかの県で協力協定が結ばれ[53]，また，ジャック・ドリオは，クリシー事件のあと，フランス社会党（PSF）を率直に弁護した。しかし，その後も，激しい党員獲得競争が両党間で続いた。フランス社会党（PSF）には，航空郵便パイロットとしてあまたの飛行記録を打ち立て，サン・テクジュペリの小説のモデルにも擬せられる国民的英雄で，1934年2月6日事件をきっかけに火の十字架団に入団していたジャン・メルモーズ[54]がいて，ド・ラ・ロックからも手厚く遇されていたが，1936年12月，この英雄的飛行家が南大西洋上で消息を絶った直後，生前のかれがフランス人民党に入党する意向を表明していたとドリオがほのめかしたときには，フランス社会党（PSF）の幹部たちもさすがに狼狽した[55]。

1937年3月27日，フランス人民党機関紙『国民解放』の論説で，ジャック・ドリオが，マルクス主義者の破壊活動にたいして「フランスのもろもろの自由を守ろうと願うすべての人びと，すべての政党を結集した自由戦線」の結成を提案したとき，ド・ラ・ロックとかれの支持者たちは，それがフランス社会党（PSF）のメンバーの支配をねらった企てではないかと疑った。フランス社会党（PSF）の党員たちのあいだで自由戦線の加盟者リストがひそかに配布され，それを知ったド・ラ・ロックは不満を漏らしたが，しかし，同党がナショナリストの勢力を分裂させようとしているとみられたくはなかったので，ドリオの呼びかけには慎重に応答しなければならなかった[56]。ド・ラ・ロックとかれの同僚たちは，ドリオの提案を好意をもって迎えるという気持を表明したが，しかし，同時に，フランス社会党（PSF）とそのパートナーになると予想される他の右翼組織との違いを主張しつづけ，自由戦線がフランス社会党（PSF）のメンバーを引き抜いたり，不当に支配したりすることに利用されないようつよく要求した[57]。

1937年4月24日には，共和派連盟と国民社

52) *L'Emancipation nationale*, 11 juillet 1936; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.219-225; Bertrand de Jouvenel, Le Parti Populaire Français, *Sciences politiques*, 52, 1937, pp.363-370; R. Soucy, *op. cit.*, pp.256-268, (traduction française) *op. cit.*, pp.358-373.

53) *Archives départementales des Alpes-Maritimes*, 4M 542, commissaire divisionnaire de police spéciale, 1 octobre 1936, 4M 543, directeur de la police d'Etat, 9 octobre 1936, préfet, 27 janvier 1937; S. Kennedy, *op. cit.*, p.135.

54) 剣持前掲書, pp.89, 131-132.

55) *Archives Nationales*, F^7 14817, rapport, janvier 1937; *L'Emancipation nationale*, 12 décembre 1936.

56) Ph. Machefer, L'Union des droites. Le PSF et le Front de la Liberté, 1936-1937, op. cit., p.118;

57) Fondation Nationale des Sciences Politiques, *Archives De La Rocque*, X , C2a, 1937, discours de La Rocque, bulletin no.29, 27 avril 1937; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.573, 1055.

会共和党が右翼連合結成のための調整委員会の設立協定を結び，フランス社会党（PSF）にもこれに加わるよう提案した[58]。同年5月8日に，冬期競輪場での集会において，ジャック・ドリオは自由戦線の結成を正式に表明したが，フランス社会党（PSF）はこの集会に同党の下院議員フェルナン・ロッブと政治局長エドモン・バラシャンを使者として送るにとどめた。2週間後の5月21日の『グランゴワール』紙とのインタヴューのなかで，ド・ラ・ロックは，フランス社会党（PSF）が全国在郷軍人連合とのあいだで協定を結んだとき，同連合の委員長ジャン・ゴワがフランス人民党にも協定に参加するようつよく迫ったにもかかわらず，ジャック・ドリオはそれに異議を唱えたことをあきらかにし，それはドリオがかれの支配下に置けない協力協定には関心をもたなかったことを意味していると主張し，反人民戦線勢力の団結へのドリオの熱意の真剣さに疑念を呈した。一方で，ド・ラ・ロックは，フランス社会党（PSF）は，「自由戦線への参加によって，予見能力のない古ぼけた組織や古ぼけた人びとの価値回復に奉仕」することは望んでいないとのべ，指導者たちの硬化症によって人民戦線の政権掌握を許した古典的右翼を非難した[59]。

このころ，フランス社会党の下院議員ポール・クレセールが，ドリオに宛てた手紙のなかで，フランス社会党（PSF）は地方レヴェルの協定は拒否しないであろうが，恒常的な同盟を結ぶことはできないであろうと告げ，その理由をつぎのような文章で説明している。「マルクス主義にたいする戦いは，必要ではあるが，しかし，それは“否定的な”戦いで，われわれの行動の本質をなすものではありません。われわれの行動の本質，それは階級闘争を排除し，市民的奉仕の規律を確立し，職業労働を組織し，このようにしてつくられた新しい制度とその経済的役割に共和制国家を適合させることをめざした道徳的，社会的，政治的秩序における“肯定的な”革命なのです[60]。」このクレセールの文章は，あいまいな表現ではあったが，たんに反共産主義をめざした政党結集の“否定的”性格を主張しようとするものであった。

たしかに，「反ファシズム」が人民戦線結成の絆であったのとはまさしく対照的に，「反共産主義」は中道派から極右までのきわめて異なった諸組織をつなぐ唯一の絆であった。しかし，フランス人民党との連合は，左翼勢力とフランス国民のすくなからぬ部分からファシズムの嫌疑をかけられていたフランス社会党（PSF）をまちがいなく危険に巻き込むであろうとおもわれ，クレセールも，ドリオ宛ての手紙のなかで，「自由戦線は，その敵対者には，ファシストの共同戦線とみられるでしょうし，それはむしろ人民戦線を強化し，フランスを2つの陣営に分裂させることになりましょう」とのべていた。フランス社会党（PSF）は，自由戦線を，その反動として，いまや弱体化しつつあった人民戦線の団結をかえって強化することになりかねない右翼連合とみたのであった。

自由戦線への加盟問題は，1937年6月9日に召集されたフランス社会党（PSF）臨時全国評議会で決着をみた。同党の指令を受けてフランス人民党との交渉に当たっていたフェルナン・ロッブの報告は，「われわれは現在，ひとつの実験の終わりに立ち会っている。その実験をおこなった与党は，その極左からの右派の離反を勇気づけることのできる風土のなかでしか崩壊しないであろうが，自由戦線の風土は，逆に，この崩壊の過程を阻止するものである」と結論した。また，かれの報告は，あらためて，フランス社会党（PSF）が「極右」という刻印

58) Fondation Nationale des Sciences Politiques, *Archives De La Rocque*, Ⅱ, A6, lettre de René Richard à Barrachin, 4 mai 1937.

59) *Gringoire*, 21 mai 1937.

60) *Le Flambeau de Flandre-Artois-Picardie*, 15 mai 1937.

を拒否し，あまりにも基礎の偏狭な連合のとりこにならないよう注意を促し，フランス社会党（PSF）が，その力相応の役割を演じることのできる広範な反共産主義連合のなかに，人民戦線のなかの穏健派分子を引き入れようという意志を表明し，ファシズム的傾向をもった右翼の結集はただ人民戦線勢力を結束させるだけであろうと主張していた[61]。この結果，フランス社会党（PSF）全国評議会は，自由戦線の結成が力の弱まりつつある人民戦線の復活をたんに助けるためのものでしかないであろうと考えて，参加拒否を決定したのである[62]。

ドリオの提案を拒否しても，フランス社会党（PSF）の指導者たちは，特定の問題や選挙協定にかんしては協力が望ましいと考えた[63]。しかし，協力の努力は，その後もフランス社会党（PSF）とフランス人民党とのあいだに続いた軋轢のために，しばしば失敗した。1937 年 5 月，ジャック・ドリオが，社会党員ドルモワ内相によって職権濫用と汚職を告発され，サン・ドニ市長の職を罷免されたとき，フランス社会党（PSF）アミアン支部の代表者は，この罷免措置を「不正で恣意的」であると批判して，ドリオへの支持を約束した[64]。けれども，翌月におこなわれたサン・ドニ市長選挙はドリオの惨敗に終わり，かれはフランス社会党（PSF）の支持はまったく消極的で，なかったに等しいと同党を非難した。

結局，自由戦線への加盟に同意したのは共和派連盟，テタンジェの国民社会共和党，フランス人民党だけにとどまった。最大の党員数を擁するフランス社会党（PSF）の参加拒否は，右翼勢力提携への動きにとって致命的であった。

1937 年 6 月 20 日，ド・ラ・ロックは，自由戦線への参加拒否の理由にふれて，「われわれが自由戦線にはいることは，民衆層にたいする党員募集の門戸を閉ざしてしまうことを意味していました。そして，われわれはファシストと分類されたことでありましょう。それは，われわれが絶対に望まないことでありました[65]」と語っている。また，ド・ラ・ロックが自由戦線を拒否したのは，かれがフランスを内戦に導きかねないこれ以上の国内の政治的二極化を思いとどまらせたいと願ったためでもあった[66]。人民戦線政府の遭遇していた困難が不確実な未来の到来を予見させていた 1937 年春から夏にかけての数週間に，ド・ラ・ロックは，自由戦線への参加を拒否することによって，内戦への道を拒否し，同時に，ジャック・ドリオが体現しようとしていたフランス流ファシズムの方法とイデオロギーへの偏流を拒否したのであった。

しかし，それは同時に，フランスの右翼勢力のヘゲモニーを握り，他のグループに従属するのを避けたいという，ド・ラ・ロックとその同僚たちが抱いていた最重要な願望のためでもあったろう。いずれにせよ，自由戦線がフランスの政治的二極化を強めるという理由でそれを拒否したことによって，フランス社会党（PSF）はみずからを他の右翼組織と差別化することができたのであった[67]。

1936 年末までには，ド・ラ・ロックはフランス社会党（PSF）のために日刊紙を手に入れようと動いていた。火の十字架団時代から発行されていた『ル・フランボー』紙は最初月刊，ついで週刊になっていたが，フランス社会党

61) F. Robbe, Le Parti Social Français et le Front de la Liberté, *Le Flambeau*, 22, 29 mai, 12 juin 1937.

62) J. Nobécourt, *op. cit*., pp.575-576; S. Kennedy, *op. cit*., pp.135-136; 竹岡前掲書, pp.843-846; 剣持前掲書, pp.106-114.

63) *Archives Nationales*, 451A 116, mémo, Direction province, 18 juin 1937; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.273-274.

64) *Archives départementales de la Somme*, 99M 165, commissaire de police, 1 juin 1937; S. Kennedy, *op. cit.*, p.136.

65) *Le Télégramme*, 21 juin 1937.

66) J. Nobécourt, *op. cit*., pp.573-580; *Le Petit Journal*, 19 janvier 1938.

67) Michel Dobry, Thèse immunitaire face aux fascismes, in Michel Dobry éd., *Le mythe de l'allergie française au fascisme*, Albin Michel, Paris, 2003, pp.54-55; S. Kennedy, *op. cit*., pp.136-137.

（PSF）の結成とともに，いっそう広範な読者を獲得するためには，日刊紙を所有することがぜひとも必要と考えられるようになっていた。こうして，フランス社会党（PSF）はレーモン・パトノートル（かれは皮肉にも人民戦線の支持者であった）から『ル・プティ・ジュルナル』紙を買収することを決定し，1937年5月25日，同紙の獲得を発表した[68]。

一方，このころまでには，ド・ラ・ロックとフランス社会党（PSF）にたいする執拗な反宣伝活動の計画が進行していた。アンドレ・タルデューがその立役者のひとりであった。タルデューは1929年末から1930年代初めにかけて首相をつとめ，その後も政界への強い野心を抱きつづけ，かつてはかれや右翼の大物政治家たちのご機嫌取りに熱心な若造にすぎなかったド・ラ・ロックが，かれとの関係を絶ち，いまや広範な大衆に支持された組織の確立に成功したことを羨んでいた。また，かつては火の十字架団の団員でもあったが，いまではフランス社会党（PSF）にたいして強い敵意を抱くようになっていた共和派連盟のグザヴィエ・ヴァラやフィリップ・アンリオも協力を惜しまなかった。さらに，フランス社会党（PSF）の結成に反対してド・ラ・ロックと袂を分かち，火の十字架団の元団員たちをド・ラ・ロックから奪い取ろうとしていたポッゾ・ディ・ボルゴがかれらに加わった。

1937年7月15日のウルトラ・ナショナリズムの新聞『ショック』に，ポッゾ・ディ・ボルゴは，ド・ラ・ロックが国民的大義を個人的野心のために犠牲にしたと非難し，これにくわえて，アンドレ・タルデューが，首相在任中，火の十字架団からの支持と引き替えに月々2万フランの秘密の政府資金をド・ラ・ロックに供与していたと主張した[69]。ポッゾ・ディ・ボルゴの非難記事につづいて，『アクシヨン・フランセーズ』紙がド・ラ・ロックの軍歴を攻撃して，かれが命令に従わない臆病者であったとほのめかし，また，フランス社会党（PSF）がレオン・ブルム内閣の後を継いだカミーユ・ショータンを首班とする新しい人民戦線内閣と極秘裡に協力していると非難した[70]。さらに，ジャック・ドリオが，フランス人民党はフランス社会党（PSF）にけっして味方しないと明言したうえで，しかし，「フランス社会党（PSF）の賞賛に値する兵士たちが他の戦士たちと結束して自由戦線に参加する」のをとめたりはしない，とつけくわえた[71]。こうして，反抗的で扱いにくい指導者ド・ラ・ロックをかれの広範な支持者の基盤から切り離そうという希望が，多くのウルトラ・ナショナリストたちのあいだで大きくなっていった。

ド・ラ・ロックは，かれを非難するこれらすべての十分な証拠もない申し立てをきっぱりと否定し，かれの非難者たちは，かれへの攻撃をつうじて，陰険な手段でフランス社会党（PSF）とナショナリストの大義全体を傷つけているのだとつよく主張した。そして，「フランスの生存そのものが大きな危険にさらされている今日，かれらは，フランスを守ることのできる唯一の社会的な力を破壊するために全力を尽くしているのだ[72]」とのべた。

同時に，ド・ラ・ロックは各県への視察旅行を始め，3週間余で76県を回り，支持者たちにたいしてタルデューらの非難を否定しつづけた。この段階では，ド・ラ・ロックは，このような方法が裁判に訴えるより好ましいと信じていたようである。しかし，ド・ラ・ロックが，ポッゾ・ディ・ボルゴにたいする反論のなかで，かれを虚偽に満ちた非難を左翼系新聞に掲載させた「失格した」愛国者と呼んだことにたいして，ポッゾ・ディ・ボルゴがド・ラ・ロックを

68) 剣持前掲書, pp.126-128.
69) *Choc*, 15 juillet 1937.
70) *L'Action française*, 1, 11 août 1937.
71) *La Liberté*, 8 août 1937; *Le Jour*, 21 août 1937.
72) *Le Flambeau*, 31 juillet 1937.

名誉毀損で告訴したため，それを受けて立たざるをえなかった。ド・ラ・ロックは逆告訴を決意し，『ショック』紙，『アクシヨン・フランセーズ』紙，『ル・ジュール』紙，『ル・ポピュレール』紙，『ユマニテ』紙を含む多数の新聞とその新聞記者を名誉毀損で訴えた。火の十字架団再建の責任を問われる訴訟と並んで，フランス社会党（PSF）はあらたな訴訟をたたかわねばならず，1937年秋から翌年冬のあいだ中，ド・ラ・ロックとかれの同僚たちは，法廷闘争に多大の時間とエネルギーを費やさねばならなかった。

ポッゾ・ディ・ボルゴの名誉を毀損したとして訴えられたド・ラ・ロックの裁判は，1937年10月26日リヨンで始まったが，この裁判はフランス社会党（PSF）にたいする右翼系新聞の激しい攻撃を誘発した。同党が同時に政府当局の取り調べを受けているという事実も，他のウルトラ・ナショナリストたちからの同情をほとんど引かなかった。『アクシヨン・フランセーズ』紙は，火の十字架団を再建したド・ラ・ロックの責任を問う政府の告発を批判したが，しかし，その批判は，ただ，それが「共産主義秘密同調者」の政府の仕業であるという理由からであった。同紙は，自分は共和制に脅威をあたえる人間ではないと裁判で陳述したド・ラ・ロックの主張をその通りだといい，かれにたいする侮蔑の態度を鮮明にして，「かれは共和制の諸制度にたいして信仰と深い愛着を抱いている」と冷笑した[73]。『アクシヨン・フランセーズ』紙にとっては，ド・ラ・ロックがナショナリズムの大義を裏切ったということが，かれが罰せられなければならない本当の理由なのであった[74]。

裁判にはアンドレ・タルデューが証人として出廷し，火の十字架団に政府の秘密資金が提供されたとするポッゾ・ディ・ボルゴの告発を支持した。そして，かれが首相在任中にド・ラ・ロックから受け取った手紙[75]を証拠として提出し，ド・ラ・ロックはその支持者たちにふさわしくはなく，「まだ，かれを信じ，信じるのをやめようとはしないかれの党のあの大勢の勇敢な人びとにたいし，卑しむべき男にかんする真実を語ることによって，かれらを助けたいと願っている」とのべて，証言を締めくくった。裁判はポッゾ・ディ・ボルゴの名誉毀損の主張を認め，11月9日，ド・ラ・ロックにたいして200フランの罰金を科し，ポッゾ・ディ・ボルゴへの損害賠償金として，要求額15万フランの一部3,000フランを支払うよう命じた[76]。

11月15日にパリで始まった多数の新聞と新聞記者にたいしてド・ラ・ロックが起こした訴訟もまた，かれにとって期待はずれの結果しかもたらさなかった。『アクシヨン・フランセーズ』紙は訴因の一部について名誉毀損で有罪とされたが，『ユマニテ』紙など他の被告は比較的軽い罰金を科せられるにとどまり，新聞記者たちはすべて無罪とされた。ド・ラ・ロックはこの判決に不服で控訴したが，しかし，結局，訴訟を続けることを断念した[77]。

タルデューが法廷に提出したド・ラ・ロックの手紙には，金銭の授受をにおわせるような箇所はどこにもなく，秘密資金提供の証言には十分な信憑性がなかった[78]にもかかわらず，ド・ラ・ロックがタルデューから金銭を受け取って

---

73) *L'Action française*, 14 décembre 1937.

74) S. Kennedy, *op. cit*., p.141.

75) *Archives Nationales*, 324AP 79bis, De La Rocque à Tardieu, 27 avril 1931, 16 juin 1932.

76) *Le Temps*, 28 octobre, 17 novembre 1937; François Monnet, Refaire *La République. André Tardieu, une dérive réactionnaire (1876-1945)*, Arthème Fayard, Paris, 1993, pp.450-453; G. Howlett, *op. cit.*, p.263; Philippe Machefer, Tardieu et La Rocque, *Bulletin de La Société d'histoire moderne*, 15, 1973, pp.16-17; 剣持前掲書, pp.120-123.

77) *Le Temps*, 18, 30 novembre, 1 décembre 1937, 3 janvier 1938; G. Howlett, *op. cit*., pp.263-264.

78) J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.599-622; Albert Kéchichian, *Les Croix de Feu à l'âge des fascismes. Travail Famille Patrie*, Champ Vallon, Paris, 2006, pp.87-93; S. Kennedy, *op. cit*., p.33; 剣持前掲書, pp.120-124; 竹岡敬温「フランス・ファシズムと火の十字架団（1）」『大阪大学経済学』第59巻第2号，2009年9月, p.7.

いたという非難は，フランス社会党（PSF）のリーダーもまた，かれが長年糾弾してきた腐敗した政治制度からのおこぼれを頂戴していたのではないかとおもわせ，若干の支持者を動揺させ，その離党を引き起こした。しかし，裁判をつうじてド・ラ・ロックにたいする攻撃によって播かれた疑惑にもかかわらず，フランス社会党（PSF）は強い反発力をみせ，その後も新しいメンバーを引き寄せつづけたのである。

自由戦線をめぐる論争によってすでに高まっていたフランス社会党（PSF）と他の右翼政党とのあいだの緊張は，裁判によっていっそう激化した。フランス社会党（PSF）が，共和派連盟にたいして，秘密資金提供問題でド・ラ・ロックを乱暴に攻撃したグザヴィエ・ヴァラとフィリップ・アンリオの関係を絶つよう要求したとき，共和派連盟委員長ルイ・マランは，ド・ラ・ロックが，左翼や中道派のグループ，とりわけ民主同盟や急進党の議員たちに近づこうとし，さらには，人民戦線政府の閣僚たちのご機嫌を取り，フランス社会党（PSF）が解散させられるのを避けるために，かれらとの交際を深め，かれらとともに共和派連盟を排撃しようとするまでになっていると非難し，このようなやり方は愛国的大義を弱めるだけだとのべた[79]。

反人民戦線勢力結束の必要があらがいがたい力とならなかったのは，ひとつには，人民戦線が最終的には社会秩序にたいする根本的な脅威とはならなかったからであったろう。さらに，人民戦線の内部分裂がしだいにあきらかになり，その反対者たちには，人民戦線がいつまでも長くは続かないであろうとおもわれたことが，かれらに待ちの姿勢をとらせたのであったろう。このような状況下で，極右のリーダーたちは，ライヴァル同士の競合をほしいままにしたのであった。

もうひとつの裁判，火の十字架団の再建の責任を問う裁判は，ド・ラ・ロックの名誉毀損の罪を裁く裁判が終わってまもなく，1937年12月11日に始まったが，ド・ラ・ロックとその同僚たちは，この裁判で，フランス社会党（PSF）とその前身である火の十字架団との差異を認めさせることにさまざまな努力を払った。フランス社会党（PSF）の執行委員で宣伝部長のシャルル・ヴァランは，1937年冬，雑誌『政治学』に論稿を寄せ，1936年の火の十字架団解散によって，フランス社会党（PSF）はその闘争好きな過去との関係を絶つことができたのだとのべ，同様に，ド・ラ・ロックは「フランス社会党（PSF）は火の十字架団の遺灰のなかから生まれたのではなく，解散の原理そのものから生まれたのである。なにものも再建されず，なにものも継続していない」と主張した[80]。しかし，ド・ラ・ロックが，フランス社会党（PSF）結成当初の『ル・フランボー』紙上で，火の十字架団と新党との連続性を強調し，新党は「火の十字架団の成果が開花したもの」であり，「火の十字架団精神」によって勝利の日まで導かれていくであろうと声明した事実[81]が，かれにたいして不利に使用され，検察側は，フランス社会党（PSF）の軍隊的組織にくわえて，同党とその前身との結びつきをド・ラ・ロックが公言していることは，同党が火の十字架団の継承者であることを示していると結論した[82]。

裁判が始まって8日後の1937年12月22日，ド・ラ・ロックとかれの同僚たち，ジョルジュ・リシェ，ノエル・オッタヴィ，シャルル・ヴァ

79) W.D. Irvine, *op. cit.*, pp.149-151; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 1952, note, 2 décembre 1937; Ph. Machefer, Le Parti social français, op. cit., p.309.

80) Charles Vallain, Le Parti Social Français, *Sciences politiques*, 52, 1937, pp.211-224; *Le Flambeau*, 2 janvier 1937; PSF, *Bulletin d'informations*, no.28, 20 avril 1937, supplément, Schéma de conférence-nous ne sommes pas fascistes.

81) Lt.-Colonel de La Rocque, Délèglement, *Le Flambeau*, 1 août 1936; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.429-430; 竹岡前掲書, p.828.

82) G. Howlett, *op. cit.*, pp.203-206.

ラン，フィリップ・ヴェルディエ，ジャン・イバルネギャレーは，火の十字架団を再建したとして有罪の判決を受けた。裁判所は，とりわけフランス社会党（PSF）の組織が急速な動員を確実にしようとしてつくられているという理由で，同党はその前身である火の十字架団と基本的に類似していると判断し，「宣伝遊撃班」は「ディスポ」に類似した民兵組織と考えられると結論した。しかし，裁判所は被告たちが1936年1月11日の法律に違反したとみなしたけれども，フランス社会党（PSF）の解散を命令することはなかった。1936年後半の6か月以後のフランス社会党（PSF）の全資産の没収が命じられたが，被告たちに科せられた罰金刑はそれほど厳しくはなく，その額はド・ラ・ロックには3,000フラン，他の被告たちにはそれぞれ1,000フランであった。ド・ラ・ロックは判決を不服として控訴し，1938年6月には，罰金はそれぞれ2,000フランと600フランに減額された。同時に，裁判所は，先の有罪判決を支持するけれども，フランス社会党（PSF）はもはや火の十字架団と同等ではないと言い渡した[83]。

3. 中道派への接近

フランス社会党（PSF）は，その反体制活動を疑われ非難されるたびに，共和制擁護の信条を繰り返し強調してきたが，さらに，この時期，ド・ラ・ロックとかれの同僚たちは，中道派政党である急進党のメンバーに接触しようとすることによって，人民戦線を内部から分裂させようとした。このような行動は，フランス社会党（PSF）が右翼の諸勢力からの孤立を深めていった事実と同様に，同党がフランスの政治地図のなかで穏健中道へ移行していったとおもわせるものであった[84]が，その変化は環境の産物でもあり，計算の結果でもあったろう[85]。

フランス社会党（PSF）の政治局長エドモン・バラシャンは，同党が現行の第3共和制の擁護者とみられなければならないと力説しているが，それは，かれが，多くのフランスの有権者は過度に極右の組織にたいしては支持をためらうであろうから，フランス社会党（PSF）は穏健派であるとの印象をあたえなければならないと信じていたからであった[86]。バラシャンは，おそらくフランス社会党（PSF）が結成された1936年に書いたとおもわれるメモのなかで，「大衆をひきつけるためには，党にもっと民主主義的で共和主義的な外観をあたえることが望ましいであろう[87]」とのべている。また，フランス社会党（PSF）の宣伝部長シャルル・ヴァランも同じような方針を示していて，1936年に同党の演説家たちにあたえた指令のなかで，フランス社会党（PSF）はとりわけ共産主義に反対する共和制の擁護者とみられるようにしなければならないと繰り返しのべている。しかし，それにつづけて，かれは，採用されるべきは，新しい思想ではなくて新しい方法であり，「フランス社会党（PSF）の宣伝活動はその精神においては完全に火の十字架団のままであらねばならず，外形においては政治的にならなければならない。その奥義は同一のままであり，演説家は，この部分を解説するにあたっては，なにものも変更してはならない[88]」とつけくわ

83) J. Nobécourt, *op. cit*., pp.611-612; S. Kennedy, *op. cit*., pp.145-146.

84) Serge Berstein, De la démocratie plébiscitaire au gaullisme, in Serge Berstein éd., *Cultures politiques en France*, Editions du Seuil, Paris, 1999, p.151; Jean-Paul Thomas, Le Parti Social Français, *Cahiers de la Fondation Charles de Gaulle*, 4, 1997. pp.42-43.

85) S. Kennedy, *op. cit*., pp.147-148.

86) Xavier Vallat, *Le Nez de Cléopâtre. Souvenirs d'un homme de droite (1919-1944)*, Editions les Quatre Fils Aymon, Paris, 1957, p.140.

87) *Archives de Paris*, 212/69/1, article 152, Barrachin, Point de vue personnel sur la position politique du parti à ce jour, n.d.

88) *Archives de Paris*, 212/69/1, article 152, Vallain, Note pour les orateurs du siège (2), 16 juillet 1936.

えている。

結成後の数か月間，何度も，人民戦線の活動家や警察との激しい衝突事件を起こしたフランス社会党（PSF）の行動は，党のイメージを穏健にするという，これらの要求に背くものであったが，しかし，他方で，同党にたいして加えられた解散の脅威は，あらためて，この要求に答えるための努力を強化させる結果をもたらした。1937年5月末には，バラシャンは，その公開講演のなかで，フランス社会党（PSF）は，ファシズムと独裁に反対し，革命を防ぐためにだけ，軍隊や警察とともに街頭デモをおこなうつもりであり，いま，公共の秩序を脅している政治勢力があるとすれば，それは左翼であると明言し，「フランス社会党（PSF）の党員は制服を着たりはしません。制服は若い社会主義者にやるために脱ぎ捨てたのです[89]」とのべている。

1937年12月，火の十字架団再建の責任問題を審理する裁判の進行中も，フランス社会党（PSF）の平和な意図を強調する努力が強められ，パリでは，同党の党員たちは，挑発的とみられかねないいかなる行動も避けるように指示された[90]。1938年5月におこなわれたジャンヌ・ダルク記念祭のときには，『ル・プティ・ジュルナル』紙は，フランス社会党（PSF）のパレードがいかに火の十字架団時代のパレードとは異なっているかを力を込めて説明し，パレードの参加者は「もはや，すこしまえのようには幾何学的な隊列を組まず，韻律的な歩調で音頭を取ったりはしていない。軍隊的精神は，もはやわれわれのものではない。かれらは，プラカードの後ろに集まり，群衆として通り過ぎていくだけの男，女，子供にすぎない。それは家族的で，天真爛漫な，民衆の行列である[91]」とのべている。

フランス人民党や共和派連盟からの自由戦線への参加要請を拒否したあと，極右からだけでなく右翼の一部からも切り離された状況のなかで，フランス社会党（PSF）は，中道政党への接近にその進路をみいだそうとしたのであり，とりわけ急進党との関係が同党にとって重要な問題となった。

すでに1937年1月に，フランス社会党（PSF）は，アリエ県ラパリスの下院補欠選挙に立候補した急進党右派でレオン・ブルム内閣の批判者リュシアン・ラムールーを支持して，急進党の反人民戦線派を激励し，ラムールーはこの選挙に勝利していた[92]。他の右翼諸政党からの疎外状態がフランス社会党（PSF）に急進党との接触を促したと考えられるが，そのイニシャティヴは，これもまた，おそらくバラシャンによって書かれたとおもわれる，『フランス社会党（PSF）と急進党』と題したメモ[93]に示された戦術からきたのではないかと考えられる。そのメモは，人民戦線を分裂させるには急進党をそれから離反させなければならず，そのためには，恐怖心を起こさせるような大衆動員をやめ，「はっきりとその共和主義的見解」をあきらかにし，「フランス社会党（PSF）を急進党よりも民主主義的であるとみせる」ことによって，「急進党支持者を安心させ，かれらをわれわれの影響下に置く」よう努力しなければならないと主張し，また，急進党の人民戦線賛成派と反対派との分裂を促進させなければならないと力説していた。

火の十字架団は，そのメンバーをとくに中産階級のなかから，とりわけ，賃金取得者ではない，当時，労働力人口のなかで大きな比率を占

89) *Le Flambeau*, 29 mai 1937.
90) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 1952, rapport, 29 décembre 1937.
91) *Le Petit Journal*, 9 mai 1938.
92) *Le Flambeau*, 6, 13, 20 février 1937; Peter Larmour, *The French Radical Party in the 1930s*, Stanford University Press, Stanford, 1964, pp.171, 183, 220.
93) *Archives Nationales*, 451AP 120, no.11, Le PSF et les Radicaux, n.d.; G. Howlett, *op. cit*., pp.359-362; J. Nobécourt, *op. cit*, p.1063, note 53; S. Kennedy, *op. cit*., p.150.

めていた独立中産者から募った。中産階級は，伝統的に急進党の支持者であった。フランス社会党（PSF）が結成当初から強調したのもまた，同党が中産階級の利益の擁護者であるということであり，ド・ラ・ロックは，同党結成のコミュニケ発表直後に『ル・フランボー』紙上で，「火の十字架団の最初の信奉者は中産階級から募られた・・・われわれは本質的に中産階級の擁護者である[94]」と主張したが，その後も，かれはこの主張を繰り返しのべている。バラシャンも，1937年6月，アンバサドゥール劇場での講演のなかで，「急進党は中産階級を擁護することを放棄しました。その使命を果たすのは，フランス社会党（PSF）です」と叫び，同党が急進党に代わって中産階級の擁護者になろうとしていることを力説した。けれども，フランス社会党（PSF）の最終目的は，たんに，第3共和制の政治地図のなかで主要な位置を占めるために，急進党からその支持者を奪おうとすることだけにあったのではなかった。

1937年6月22日，レオン・ブルム内閣が急進党上院議員グループによって倒され，急進党の主要リーダーのひとりカミーユ・ショータンが社会党閣僚を含む内閣（第3次ショータン内閣）を組閣したとき，フランス社会党（PSF）の下院議員たちは不信任票を投じたが，しかし，1938年1月，社会党を排除した第4次ショータン内閣が成立したときには，不信任票を投じず，棄権した[95]。それは急進党が人民戦線との関係を絶つことにフランス社会党（PSF）は賛成するというシグナルであり，フランス社会党（PSF）にとっては，方向転換を示す最初の機会であった。

しかし，フランス社会党（PSF）の急進党への接近は，第3共和制のイデオロギー的基盤に新しい方向づけをあたえるという，同党の目的を達成するための努力の一部であったことを忘れてはならない。先に引用した，急進党にたいする同党の戦術を示したメモ[96]は，もはや「世俗的禁欲主義」が死に絶え，「欲望の連合」と化してしまった現行の形態の急進党では，マルクス主義の「寄生者」に抵抗することはできないと主張し，「マルクス主義ととりわけ共産主義はもっとも直接的な危険であり・・・急進党とそのフリーメーソンの幹部たちが完全に追放されないかぎり，フランスではなにものも変わらない」とのべ，急進党は窮局的にはフランスをつくり直そうとするフランス社会党（PSF）の努力にとって主要な障害となるとして，実際には，フランス社会党（PSF）は，急進党にたいして対立の極致にあるのだ，と結論していた。

さらに，同メモは，以前の火の十字架団時代には，その3つの形態において急進党とは正反対であったといい，それはシャルル・ペギーから受け継いだ「キリスト教的であるとともに社会的な，神秘哲学的思潮」，モーリス・バレスによって鼓舞された「ナショナリズムの運動」，そして「サンディカリスムの運動」であるとして，第1次世界大戦によって，これらの伝統を総合することが可能になり，「火の十字架団の奥義」を誕生させ，1936年までは，火の十字架団を急進党と対立させ対決させたのであり，フランス社会党（PSF）にとっても目標は同じであるが，その方法はもっと精妙でなければならないとのべている。このメモによって判断するかぎり，フランス社会党（PSF）の最終目的は，共和制の政治的スペクトルの中心に支配的な位置を占めるために急進党の支持者を引きつける[97]ことよりは，むしろ，みずからが急進党

94) *Le Flambeau*, 4 juillet 1936.

95) PSF, *Bulletin d'informations*, no.37, 24 juin 1937; *Le Flambeau*, 3 juillet 1937; Ph. Machefer, Le Parti social français, op. cit., pp.308-311.

96) *Archives Nationales*, 451AP 120, no.11, Le PSF et les Radicaux. 注93）参照.

97) フィリップ・マシュフェールやジャック・ノベクールは，このように解釈している。Ph. Machefer, Le Parti social français, *op. cit.*, p.326; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.647-651.

とは対蹠的な立場にあることを自覚し，急進党の世俗主義と堕落した議会政治への衝動を根絶やしさせることにあったといえるのではないだろうか[98]。

フランス社会党（PSF）は，共和制の諸制度に権威主義とナショナリズムの原理を行き渡らせようとしていた一方で，火の十字架団時代以上に明示的に，カトリック教と一体感をもとうとしていたとおもわれる[99]。1937年2月，ドミニコ会の週刊紙『セト』の記者とのインタヴューのなかで，ド・ラ・ロックは，カトリック教の社会的教義とかれの主張との親近関係について語り，フランス社会党(PSF)の思想的根幹は「われわれの西洋文明はキリスト教文明である」という原理にあるとのべ，同党の政策綱領は「カトリックの司教があたえる訓戒を正確に言い換えたものである」と言明している[100]。

フランス社会党(PSF)は，宗教政党ではなく，あらゆる信仰の人びとに門戸を開いてはいたが，しかし，とくに1936年秋以降，ド・ラ・ロックがフランスを「キリスト教文明」の国と主張し，フランス社会党（PSF）とカトリック教との一体感を強調するようになったのは，キリスト教の価値観を人民戦線のそれのアンチテーゼとして提示しようとしたかったからであったろう。このようなかれの意図をよく物語っているのは，「キリスト教文明」という言葉にかれが最初に言及したのが，1936年8月末の『ル・フランボー』紙で，フランスで最初の社会主義者でユダヤ人の首相レオン・ブルムについて書いた論評においてであったことである。この論評のなかで，ド・ラ・ロックは，「ブルム氏によって率いられたユダヤ人のチームは・・・外国の宣伝キャンペーンのお題目を唱える」ことによって，「無数の愛国的なユダヤ人に，かれらがマルクス主義を嫌悪していることを証明しなければならない義務を押しつけている」とのべている。そして，ド・ラ・ロックは，人種差別がフランスにはなじまないことを強調しながらも，ユダヤ人は，かれらがフランスに支配的なエートスを受け入れてはじめて，心からフランス社会に適合できるのだと主張し，国民的再生はフランスの宗教的伝統の認知に依存し，ユダヤ人が「本質的にも歴史的にもキリスト教的な・・・われわれの伝統的文明のなかに容れられなければ，国民的和解はないであろう[101]」と締めくくっている。

もちろん，ユダヤ人にたいするド・ラ・ロックの態度は，たとえば，『アクシヨン・フランセーズ』紙上で，ブルムを「割礼を施された両性具有者」と呼んだレオン・ドーデ[102]のような，心底からの反ユダヤ主義者のそれとは違っていた。ド・ラ・ロックは，ブルムの妻が亡くなった日，ブルムを個人的に批判するのは慎むべきだと言明した[103]。フランス社会党（PSF）の幹部にはユダヤ人もいて，多くの非左翼的ユダヤ人が入党を歓迎されたが，しかし，同党内に強い反ユダヤ主義の風潮が存在していたことは否定できず，それは，とりわけ同党の地方紙で明白であった。南仏の同党機関紙『ラ・フラーム・デュ・ミディ(南仏の炎)』の1937年5月号は，第1面に，レオン・ブルムを，ユダヤ教のヘレニズム化に激しく反対し，ユダヤ教への献身と厳格な宗教生活を唱えたハシデームのユダヤ人として描写し，かれをフランスから追い払うジャンヌ・ダルクの肖像の絵を載せていた[104]。アルジェリアのフランス社会党（PSF）では，とりわけ反ユダヤ感情が強力であった。アルジェの同党の党員たちは，1936年，集会に出席した帰りに乗った路面電車のなかで，「ユダ

98) S. Kennedy, *op. cit.*, p.151.
99) S. Kennedy, *op. cit.*, pp.151-152.
100) *Sept*, 26 février 1937; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.347-348; 竹岡前掲書, pp.880-881.
101) *Le Flambeau*, 22 août 1936.
102) J. Jackson, *op. cit.*, pp.250-251, 向井他訳, pp.285-286.
103) *Le Petit Journal*, 23 janvier 1938.
104) *La Flamme du Midi*, 14 mai 1937.

ヤ人を降ろせ」「フランスをフランス人の手に」といっせいに叫んだ。オランでは，多数の同党の党員たちが，フランス社会党（PSF）が正式に反ユダヤ主義の綱領を採用するよう要求した[105]。ド・ラ・ロックも，フランス社会党(PSF)がすべての信仰の人びとに開かれていると強調しながらも，ユダヤ人がフランスの国民共同体の仲間に入り，キリスト教的慣行を受け入れるという条件をつけていたのである。

1936 − 1937 年の，しだいに混乱の度を深めていった国際情勢についてのフランス社会党（PSF）の論評も，その国内的関心と一致していた。フランス社会党（PSF）結成直後の 1936 年 7 月に勃発したスペイン内戦は，フランス社会党(PSF)に，人民戦線の政策を激しく批判し，権威主義的ナショナリズムへの支持をあきらかにする機会をあたえた。

ド・ラ・ロックは，レオン・ブルム内閣が最初スペイン人民戦線を支援しようとしたことを非難し，「われわれはイベリア半島にけっして介入すべきではない」と主張し，フランスは他国の内戦からは超然としていなければならないと力説して，フランス政府に「厳格な中立」を要求した。しかし，ド・ラ・ロックはスペイン内戦の結果に無関心ではいられず，スペインの人民戦線はソ連の政策の道具にすぎず，「ボルシェヴィズムはイベリア半島全体にその攻撃部隊を差し向けている」とのべ，フランシス・フランコ将軍が「かれ自身のためではなく，われわれのために」勝利することを願い，フランコが失敗すれば，まちがいなく，それは西洋文明の恐ろしい敗北を意味することになろう[106]，と主張した。レオン・ブルム内閣は最終的にはスペイン内戦にたいする不干渉政策を採択したが，しかし，スペイン内戦が飛火したフランス領アフリカでは，多くの火の十字架団員とフランス社会党（PSF）員が志願兵としてフランコのために戦ったのである[107]。

ナチス・ドイツの脅威がしだいに増大し，フランスがそれを防ぐのにまったく無力であったとき，フランス社会党（PSF）が最初にとろうとした行動は，フランスの人民戦線が党派的分裂の種を播き，ソ連の利益に奉仕していると非難することであった。ド・ラ・ロックはナチス・ドイツを重大な脅威とみなし，歴代のフランス政府の怠慢がその状況を悪化させてきたと考えた。しかし，ドイツの脅威を阻止するためにソ連と同盟を結ぶなどということは，ドイツ第 3 帝国との戦争に突入するのと同様に，かれにはまったく考え及ばないことであった。フランスの防衛力の状態を考えれば，戦争は避けなければならず，それに，ド・ラ・ロックによれば，フランスとドイツの戦争はソ連の利益になるだけであり，「仏独戦争は，2 つの交戦国を致命的に弱体化させ，世界革命を導くことによって，コミンテルンに奉仕する[108]」だけであった。

フランスの右翼の大部分と同様に，フランス社会党（PSF）は，ドイツが強力になっていくのを憂えたが，しかし，ヒトラーを牽制するために，ソ連と同盟を結ぶというような，イデオロギー的に嫌悪すべき選択に同意しようとするのは不本意であった。この点においては，ド・ラ・ロックとかれの信奉者たちは，アンリ・ド・ケリリスやポール・レノー（民主同盟副委員長）など，反共産主義にもかかわらず，戦術的な理由から，ソ連と密接な協力関係を結ぶことに同意した政治家たちとは異なり，また，フランスとドイツとの協力の可能性に期待した

---

105) *Centre des Archives d'Outre-Mer*, Oran 70, sûreté, 23 février 1937; Richard Millman, Les Croix de Feu et l'antisémitism, *Vingtième Siècle*, 38, 1993, pp.264-265.

106) *Le Flambeau*, 22 août 1936; 渡辺和行『フランス人とスペイン内戦－不干渉と宥和－』ミネルヴァ書房, 2003 年, pp. 230 - 231.

107) *Archives Nationales*, F^7 14817, inspecteur de police mobile (Saint-Brice), 23 octobre 1936; *Centre des Archives d'Outre-Mer*, Oran 70, commissaire divisionnaire (Oran), 25 avril 1939, B3 635, commissaire de police (Saint-Arnaud), 19 avril 1939; F. Kœrner, op. cit., pp.590-592.

108) *Le Flambeau*, 12 juin 1937.

ジャック・ドリオとも大きく違っていた[109]。しかし，ナチスの体制がしだいに侵略的な拡張主義になっていくにつれて，対独強硬と対独宥和とのはざまで，ド・ラ・ロックとフランス社会党（PSF）はその立場を維持するのがしだいにむずかしくなっていった。

結成から1938年初めまで，フランス社会党（PSF）の行動は，人民戦線とだけでなくその右翼のライヴァルたちとの対決によっていちじるしく注目を引くものであった。しかし，その間，ひとつには政府から加えられた解散圧力の結果でもあったろうが，同党はしだいに準軍事的行動に頼るのをやめ，力と力の対決を避けるようになった。極右同盟から議会政党への移行の結果，ド・ラ・ロックの運動は，街頭デモや宣伝活動をつうじて漠然と圧力をかけるということから直接，国会の議席を争うことにその戦術を転換させた。しかしながら，同党が進もうとしていたのは，公然たる敵対者の人民戦線からだけでなく，政治的に類似しているとおもわれた右翼勢力からの妨害物で充満した進路であった。

フランス社会党（PSF）は，人民戦線政府にたいしては共和制擁護というレトリックを展開して，その気勢をそぐためのさまざまな努力をした。一方，右翼勢力内部の葛藤によってフランス社会党（PSF）はしだいに孤立したが，しかし，同党は生き残り，1938年には100万人近い党員を擁するフランス最大の右翼政党となった[110]。いまや，フランス社会党（PSF）はたんなる反動政党ではなかった。そのリーダーたちは，現行の第3共和制の永続にとっては不可欠な組織，急進党の支持基盤に食い入ろうとする戦術を採用したのであった。

---

[109] Charles Micaud, *The French Right and Nazi Germany, 1933-1939. A Study of Public Opinion*, Duke University Press, Durham, 1943, pp.123-125.

[110] Jean-Paul Thomas, Les Effectifs du Parti Social Français, *Vingtième siècle*, 62, 1989, pp.71-72; Michel Winock, Retour sur le fascisme français et les Croix-de-Feu, *Vingtième siècle*, *Revue d'histoire*, 90, avril-juin 2006, p.22.

D'une ligue extrême-droite au parti parlementaire. La naissance du Parti social français

Yukiharu Takeoka

En France la crise économique, déclenchée au début des années 1930, a apporté le triomphe du cartel des gauches à l' élection du mai 1932, qui a débouché sur la prise de pouvior par le parti radical. Pourtant, les gouvernements successifs du parti radical se sont révélés impuissants à vaincre le marasme économique. A la fin de 1933 sont mis au jour les escroqueries d'Alexandre Stavisky, qui ont compromis plusieurs hommes politiques. Les affaires Stavisky ont conduit, le 6 février 1934, à l'attentat des ligues d'extrême droite sur la Chambre des députés, qui s'est développé en émeute sanglante, suivie par la résignation hâtée du ministère Daladier et la formation du ministère de l'union nationale. C'est l'épreuve la plus dramatique qu'essuyât Paris depuis la Commune de 1871.

Les partis de gauche ont interprété cette émeute du 6 février comme événement suscité par les intrigues des fascistes. Il a fallu attendre la publication d'un article de René Rémond intitulé《Y a-t-il un fascisme français?》et de son livre sur *La Droite en France* à la décennie 1950, pour que soit remis en question le schéma, hérité parmi les forces de gauche, des impératifs simplificateurs du combat antifasciste.

La parution des ouvrages de René Rémond a renforcé le consensus des historiens universitaires français pour lesquels il n'y a eu de fascisme français que marginal pendant l'entre-deux-guerres.

Mais, la tentative d'interprétation du fascisme français d'un historien israélien Zeef Sternhell (*Maurice Barrès et le nationalisme français*, 1972; *La droite révolutionnaire. Les origines françaises du fascisme*, 1978; *Ni droite ni gauche. L'idéologie fasciste en France*, 1983), qui considère que le fascisme français a été un phénomène de première importance et qu'il a pu dès avant 1914 servir de matrice à ses homologues italien et allemand, a ravivé le débat sur l'existence d'un fascisme à la française.

Dans les deux tomes précédents de cette revue (*Osaka Economic Papers*, vol.59, t.2 et 3, septembre et décembre 2009), nous avons traité des Croix de Feu. Les Croix de Feu, dirigés par le lieutenant-colonel François de La Rocque, étaient le mouvement ultra-nationaliste le plus important et une cléf du problème de la présence du fascisme français. Nous avons examiné, en particulier, si on peut qualifier de fasciste le mouvement des Croix de Feu, en étudiant son idéologie et son action dans le climat politique et social en France des années 1930. Notre conclusion est que F. de La Rocque et son mouvement n'étaient pas fascistes bien qu'il nous faille admettre l'inclination de La Rocque pour l'autoritarisme.

En juin 1936, le gouvernemet du Front populaire a déclaré la dissolution des ligues extrême-droites, y comprises les Croix de Feu. Immédiatement, F. de La Rocque, acceptant le principe d'élection du régime républicain, a créé le Parti social français.

Dans cet article, nous avons esquissé la naissance et l'évolution du Parti social français.

Classificatin JEL: N44
Mots-clés: Croix du Feu, Parti social français, République